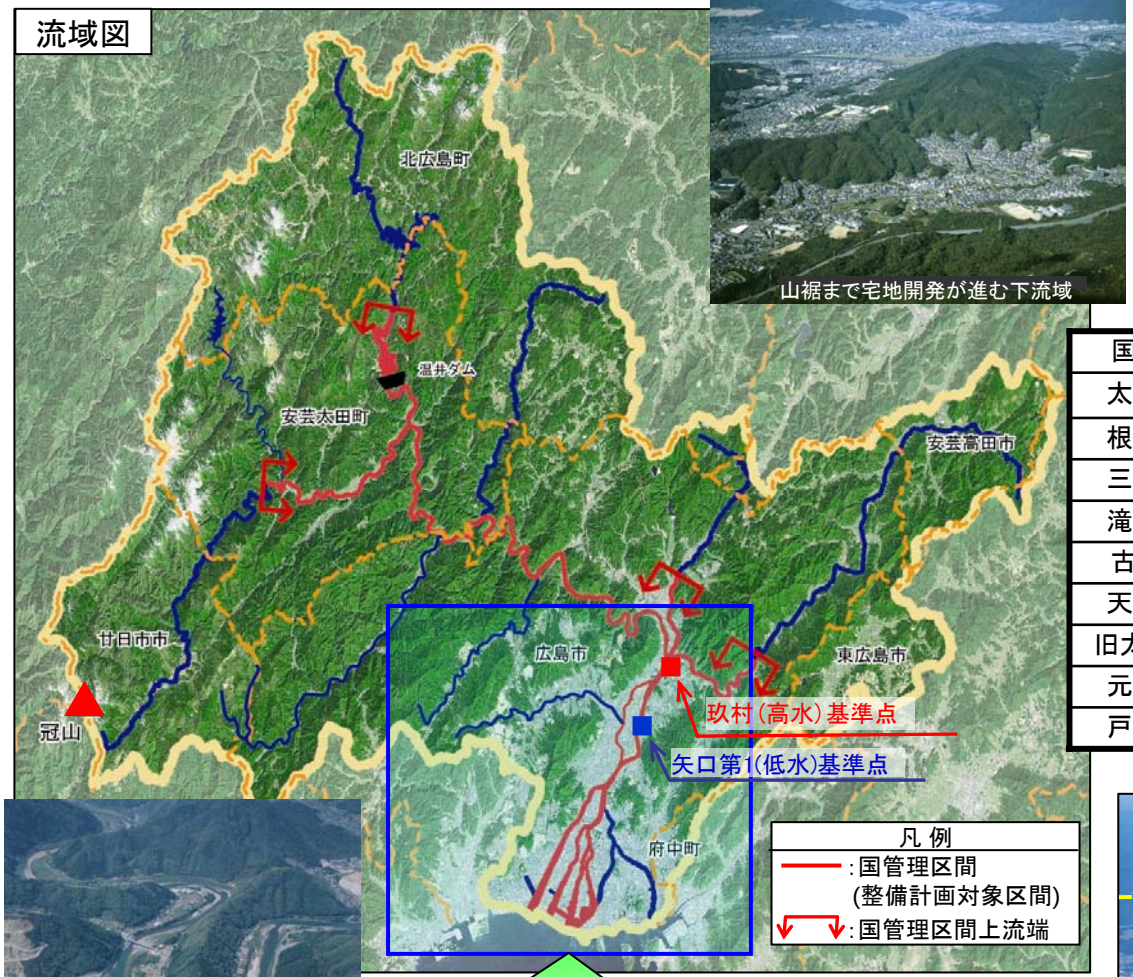
1.1 流域の概要

■三方を山に囲まれ、狭い低平地に中四国地方唯一の百万都市である広島が密集市街地を形成、市街化は周辺の山裾にも及ぶ
■人口・資産が高度集積している広島市街地と想定氾濫域が重複
■政令市にありながら、河口から20km程遡上すれば豊かな自然環境の残る河川
■河川整備計画の対象区間は太田川水系国管理区間とする

流域図



山裾まで宅地開発が進む下流域

市街地を抜けると豊かな自然環境

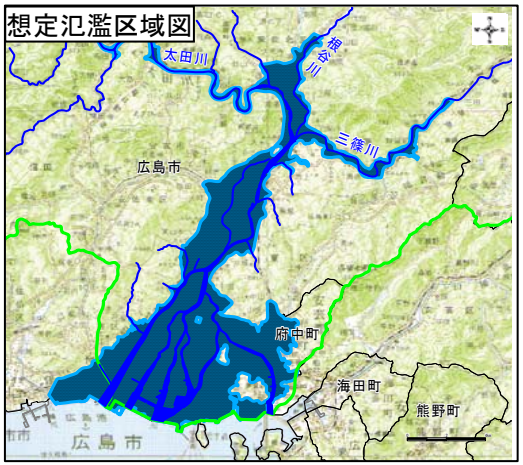
流域及び氾濫域の諸元

流域面積(集水面積)	約1,710km²
幹線流路延長	約103km
流域内人口	約98万人
想定氾濫区域面積	約76km²
想定氾濫区域内人口	約40万人

(※)出典：平成12年河川現況調査結果

国管理区間延長	
太田川	73.8km
根谷川	5.4km
三篠川	9.5km
滝山川	8.0km
古　川	7.2km
天満川	6.4km
旧太田川	8.7km
元安川	5.4km
戸坂川	0.1km

想定氾濫区域図



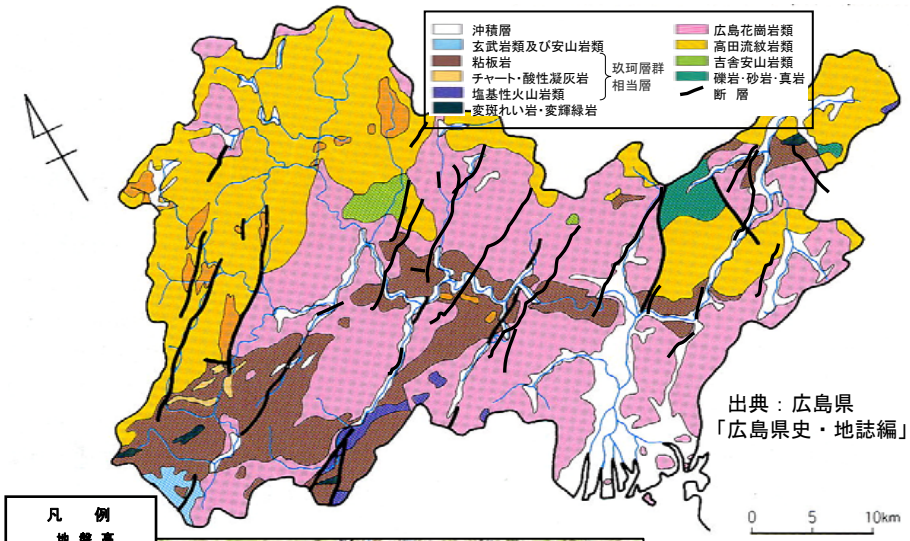
三方を山に囲まれ太田川デルタに形成された広島市街地

1.2 流域の自然特性

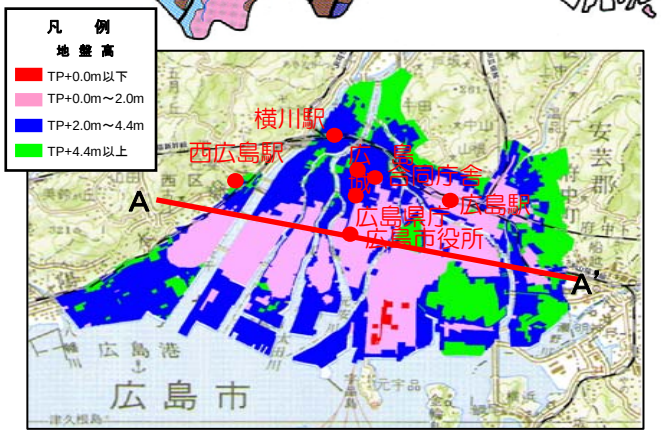
■下流のデルタ域の多くはいわゆるゼロメートル地帯。ひとたび氾濫すれば被害は甚大
■太田川流域は中国地方で最も多雨の地域

(1)地形・地質特性

・北東−南西方向の断層が卓越し、それに沿って支川が流下
・本川はこの断層に直交する形で流下
・下流デルタ域はゼロメートル地帯



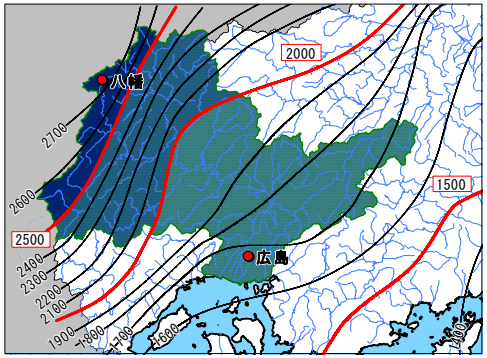
出典：広島県「広島県史・地誌編」

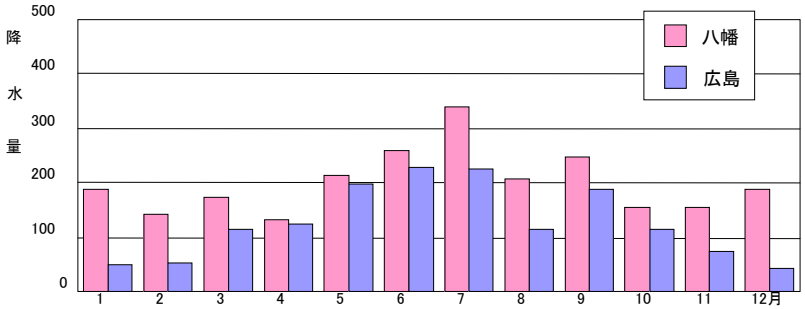


下流デルタ域の地盤高図

(2)降雨特性

・中国地方で最も多雨地域
・年平均降水量約1,800mm
・上流では冬期に積雪

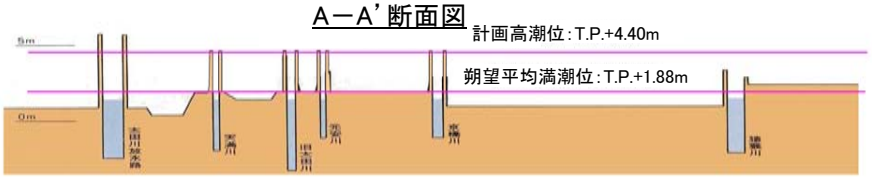




平均年降水量分布(mm)（出典：広島県「広島県史・地誌編」）

・人口の集中する下流域は、上流からの土砂堆積や干拓により形成された地盤の低い沖積地
・下流デルタ域の多くは海抜0～2mといわゆるゼロメートル地帯であり主要市街地のほとんどが計画高潮位以下
・洪水、高潮によりひとたび氾濫すれば被害甚大

A−A'断面図

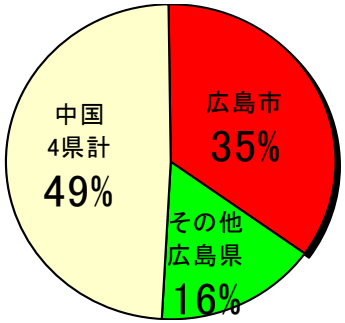


※本図は、堤防を高く変形し、みやすく表現している。

1.3 土地利用と産業

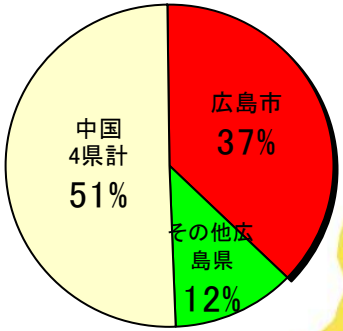
■太田川下流域の狭い低平地は、市街地や商工業地として稠密に利用
■下流デルタ域は中四国地方唯一の百万都市、広島の中心市街地が拡がり、高度な都市機能が集積
■沿岸部には工業地帯を形成

卸・小売業
年間商品販売額

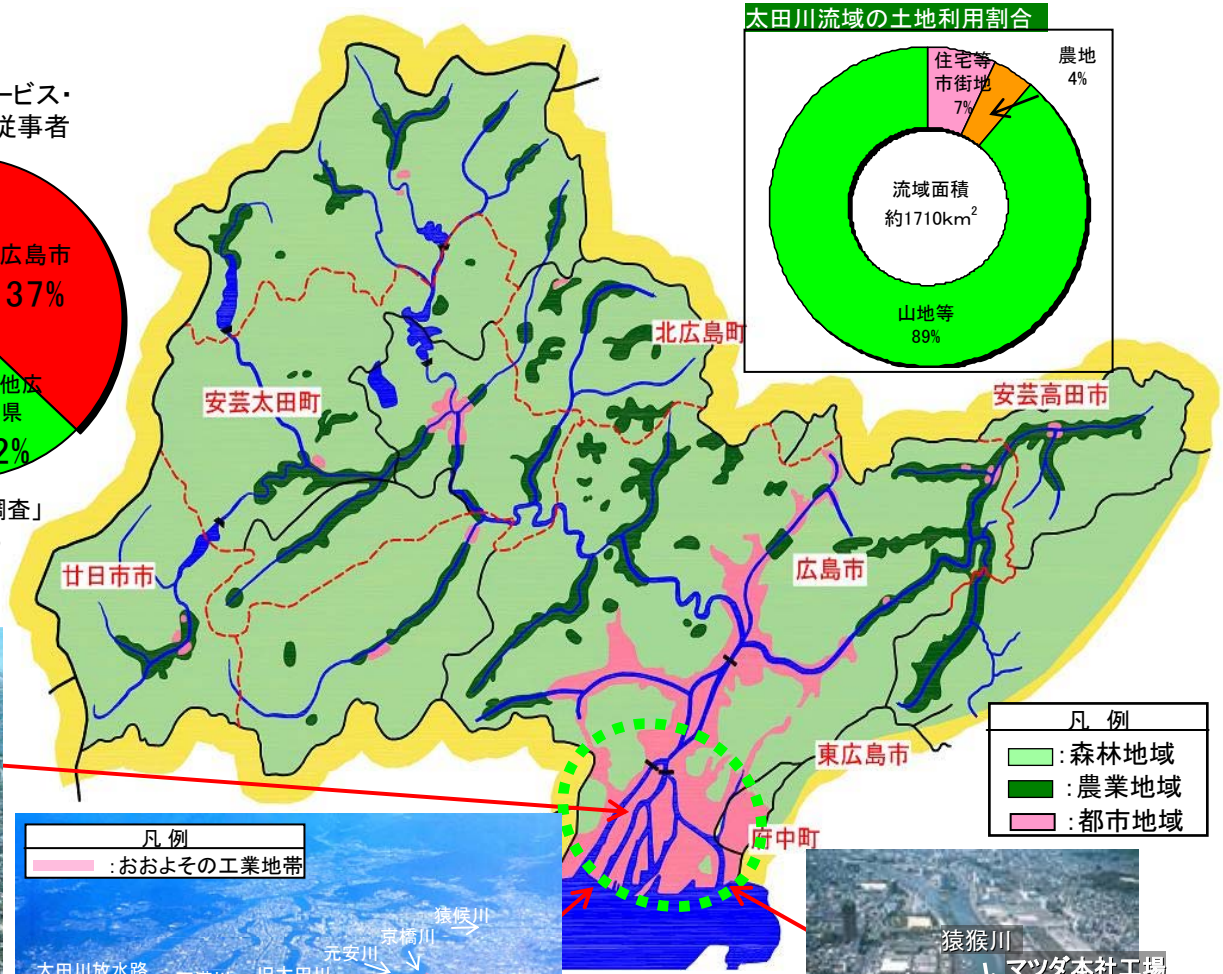


「平成14年商業統計調査」
経済産業省による

情報サービス・
調査業従事者



「事業所統計調査」
総務省による



太田川下流デルタ域の様子

広島湾から見た太田川下流の様子
注)広島市都市計画総括図を参考に、用途地域が準工業地域、工業地域、工業専用地域に指定されている地域のおおよその位置を示したものである

最下流部の工業地帯

1.4 流域の歴史

■現在の広島の町の姿は、江戸時代に骨格が形成。江戸時代は主として城を守るための治水対策を実施
■下流デルタ域の多くは江戸期～明治期に干拓により形成された低平地
■市内派川には、江戸期の舟運が盛んだった往時を偲ばせる雁木等の歴史的構築物が存在。京橋川の雁木群は近代土木遺産(土木学会)Aランクに登録

広島の町の起こり

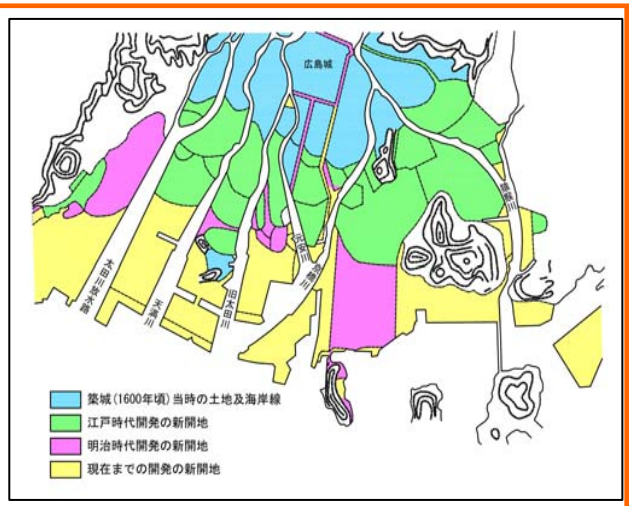
・天正17年(1589年)毛利輝元がデルタの上に築城、この地を「広島」と命名。城下町を建設
・慶長5年(1600年)に起こった関が原の戦いの後、福島正則が入城。城下町の拡張整備の他、街道整備を進める
・元和5年(1619年)浅野長晟(ながあきら)入城、以後明治維新まで続く
・1800年代前半には、江戸、大坂、京都、名古屋、金沢に次ぐ大都市となる

:城の周りの堤防を高くした範囲
● :量水標設置箇所

干拓の歴史

・江戸時代には、広島城下の南方の干潟は次々と干拓
・明治時代以降も沖へ向け干拓が進む

広大な低平地を形成



広島湾干拓の歴史変遷図

舟運が盛んだった往時を偲ばせる景観

・江山一覧図(1808年)に描かれている常夜灯や雁木は、現在でも市内派川に数多く存在する貴重な歴史的構造物となっている。なかでも京橋川の雁木群は近代土木遺産(土木学会)Aランクに登録

＜雁木とは＞
瀬戸内海は潮の干満差が大きいため、かつて生活物資の運搬船などの船着場として利用されていた川の石積護岸の階段のこと

常夜燈や雁木

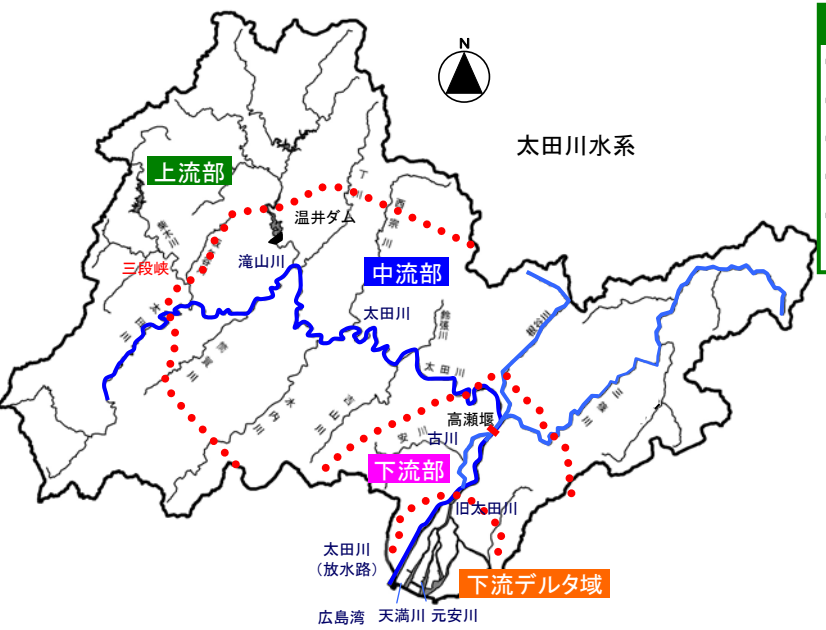
古くから名を馳せる太田川アユ

・太田川のアユは、将軍徳川家にも献上(高陽町史)
・夏目漱石も旧加計町(安芸太田町)出身の門下生に送ってもらった太田川アユを絶賛(加計町史)
・「清流めぐり利き鮎会」(高知県友釣り連盟主催)で、平成15年に水内川、平成16年に太田川が準グランプリを獲得

アユ釣りの風景

1.5 自然環境

■ 深い緑に包まれ、清らかな流れを育む上流部から、干潟に代表される塩性湿地が形成される下流デルタ域まで、それぞれの特徴に応じ、多様な自然環境が残る太田川



上流部

- 河床勾配1/50～1/100程度で山地部を流れる渓谷
- 三段峡に代表される美しい渓谷を形成
- 山地はブナ原生林やミズナラからなる二次林
- 川沿いの崖地ではヤマセミが営巣
- 河畔林が発達し瀬と淵が連続する渓流ではアマゴ・カジカが生息

中流部

- 河床勾配1/100～1/400程度で谷底平野で蛇行を繰り返す
- 直近下流部まで都市化が進んでいるものの、今なお自然の豊かな地域
- 瀬と淵が発達し、瀬はアユ等の良好な餌場、緩流域の水際植生付近には、オヤニラミが生息
- 近年、産卵のため遡上するサツキマスを多数確認
- 礫河原にカワラハハコが、洪水時に冠水する岩場にはキシツツジが生育

瀬(減水区間)

谷あいで蛇行を繰り返す中流

下流デルタ域

河口域に形成されたデルタ

- 河床勾配が1/2,000程度と非常に緩やかで、広島湾は瀬戸内海で最も干満差の激しい地域で大潮時には4mの水位差
- 市内派川沿川は稠密に都市利用され、自然が非常に少ない中、放水路は通水後40年が経過し、従来の干潟環境を徐々に回復
- 干潮時には河岸沿いに干潟が現れ、広島湾域で唯一まとまったハマサジ・フクド等の塩生植物群落を形成
- 汽水域の上流側にはヤマトシジミが、下流側にはアサリが生息

大潮時
6時間後

旧太田川
基町環境護岸付近

下流部

- 河床勾配1/400～1/1,000程度で平野が広がり、高水敷を形成
- 河川沿川が急速に市街化
- なだらかな浮き石状の瀬はアユの産卵場
- 州に広がるヤナギ類の樹林はサギ類の営巣地

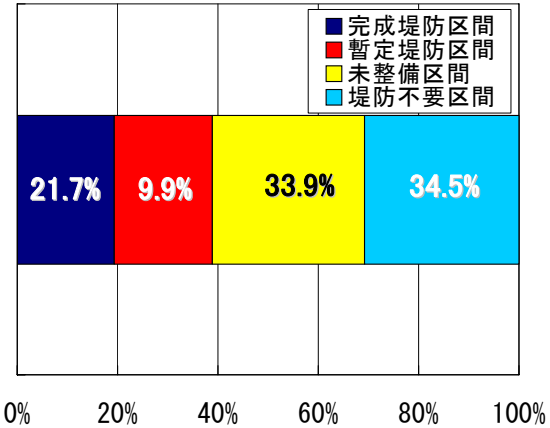
1.6 堤防の整備率

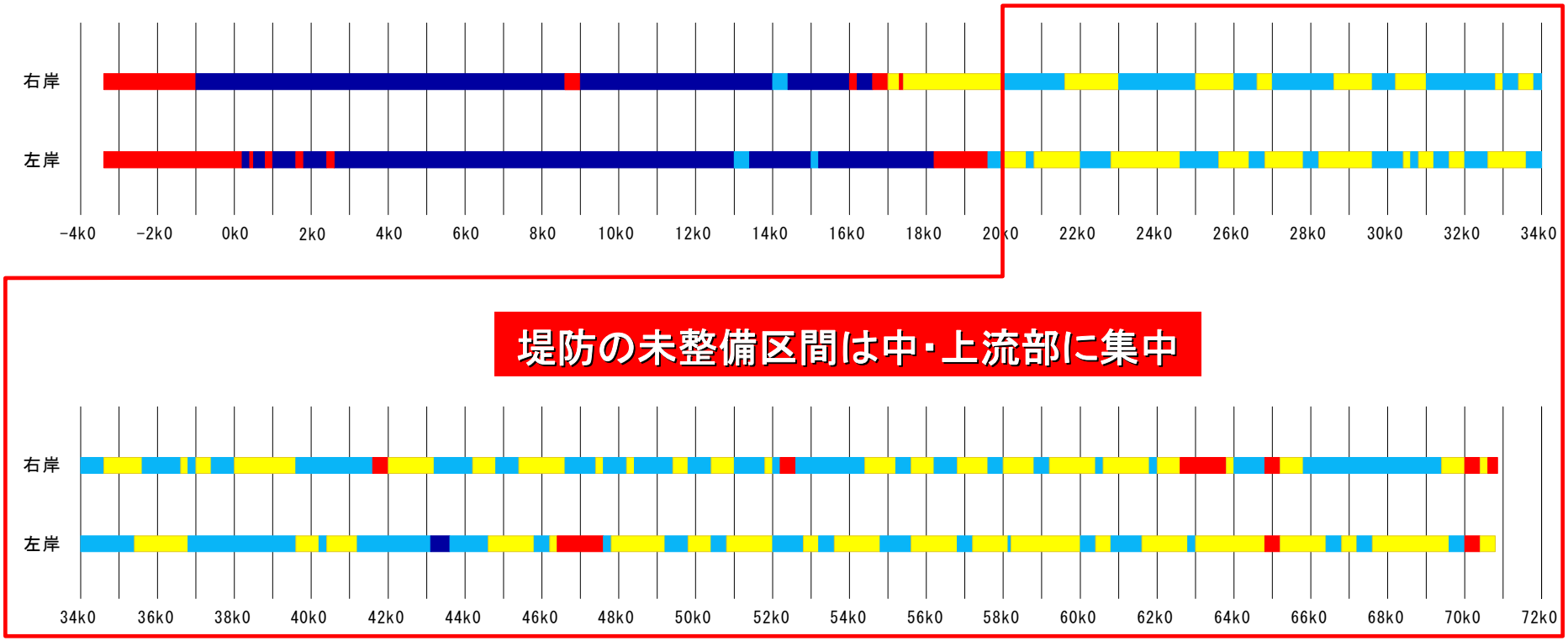
・堤防が必要な区間のうち、
約5割の区間が未整備（太田川本川）

・未整備区間は中・上流部に集中！

太田川本川の堤防整備水準

		延 長
堤防必要区間	完成堤防区間	31.8km(21.7%)
	暫定堤防区間	14.4km (9.9%)
	未整備区間	49.7km(33.9%)
	堤防必要延長	95.9km(65.5%)
堤防不要区間		50.5km(34.5%)
全体延長		146.4km





太田川本川の堤防整備状況図